

*** 今日の健康 (3月) ***
<インフルエンザ流行の裏で溶連菌が感染拡大中 2016>

国立感染症研究所によると、一般的に「溶連菌」(溶血性連鎖球菌)と呼ばれている A 群溶血性連鎖球菌による感染症が 1 月 18 日から 24 日までの患者報告数が過去 10 年の同時期で最多になり感染研は注意を呼びかけています。

報告では、昨年 1 年間に全国約 3000 か所の小児科から報告された咽頭炎の患者数は、40 万 1240 人で集計を始めた 1999 年以来最多です。全医療機関から報告される劇症型も 431 人で過去最多でした。



A群溶血性連鎖球菌
電子顕微鏡写真
(提供元:国立感染症研究所)

溶連菌は潜伏期 2~5 日ですが、潜伏期での感染性については明らかになっていません。発症する場合は突然の発熱と全身倦怠感、咽頭痛によって発症し、しばしば嘔吐を伴います。特徴的な苺(イチゴ)舌が認められる場合があります。菌が出す毒素に免疫がない人は全身に発疹が現れしやう紅熱を引き起こします。学齢期の子どもの多いです。咽頭炎は今年も増加傾向で、1 月 25~31 日の小児科 1 箇所あたりの患者数は 3.36 人と過去 10 年の同期比では最多となっています。

劇症型は、発熱と手足の痛み、腫れから数十時間で多臓器不全などに陥ることもあります。筋膜などの組織が壊死する事例もあり、「人食いバクテリア」とも呼ばれています。患者は 50 歳代以上の中高年に多く、持病がなくても重症化し、致死率は 30%に上ります。感染と発症の仕組みは分かっていません。治療は咽頭炎、劇症型ともに抗菌薬を使用します。

適切な治療を行わなかった場合、リウマチ熱、急性糸球体腎炎など非化膿性の合併症を引き起こす可能性があります。発熱、咽頭痛などの疑わしい症状がある場合は、医療機関を受診しましょう。

主な感染経路は、発症者もしくは保菌者(特に鼻咽頭部に保菌している者)由来の飛沫による飛沫感染と濃厚な直接接触による接触感染です。物品を介した間接触による感染は稀とされていますが、患者もしくは保菌者由来の口腔もしくは鼻腔由来の体液が明らかに付着している物品では注意が必要です。発症者に対しては、適切な抗菌薬による治療が開始されてから 48 時間が経過するまでは学校、幼稚園、保育園での集団生活は許可すべきではないとされています。

前澤クリニック 内科・小児科 0422-30-2861
天文台通り多摩信用金庫のななめ裏